遠い復興 もっと支援を

松蔭高生ら 陸前高田訪れ実感

名古屋大と県による「高校生防災セミナー」の参加校に指定されている松蔭高校（中村区烏森町）の生徒有志が先月末、夏休みを利用して岩手県陸前高田市を訪れた。東日本大震災から３年半が過ぎようとしているが、生徒たちは復興にはほど遠い現状に驚き、さらに支援が必要だと考えるようになった。（多園尚樹）

訪問した中心メンバーは、ボランティア活動に取り組むＪＲＣ（青少年赤十字）部の二年生四人。昨年度から防災セミナーに参加し、ボランティアや災害対応について学ぶ中、被災地を訪れたいという気持ちが芽生えた。

今年三月、同校で被災時に岩手県立大船渡高校教頭だった村上育朗さん（六四）の講演会が開かれた。話を聞くうち、そうした気持ちがさらに高まり、服部保孝校長に相談。前任地の一宮北高でも被災地との交流経験があった服部校長の橋渡しで訪問が実現した。

上岩手県陸前高田市の仮設住宅で暮らす人たちの話を聞く松蔭高の生徒たち＝同校提供　下被災地に送る手紙を準備するＪＲＣ部の生徒たち＝中村区烏森町の松蔭高で

八月二十六日夜、一、二年生二十人と教員ら計二十八人がバスで出発。二十七日昼に現地に着き、多くの人が暮らす仮設住宅を訪ねたり、今も残る津波の爪痕を見たりした。

電車が復旧していないため交通手段はバスだけ。中学校のグラウンドは今も仮設住宅で埋まり、損壊した高田高校は隣の大船渡市の高校を間借りしている。ＪＲＣ部の三瀬凪乃さん（一七）と吉田実央さん（一七）は「震災から三年以上たったのに、まだ家も決まらず、仮設に住まないといけないのか」と驚いた。

生徒たちは事前に校内で集めた募金で購入したベゴニアの鉢植えを贈った。今後はお世話になった人たちにお礼の手紙も送る。部長の野村颯汰さん（一六）は「私たちの今の生活のありがたみを感じ、今を大切に生きなければならないと思った。できる支援をしていきたい」と力を込めた。

今後は被災地訪問や防災セミナーで学んだことを在校生たちに伝え、被災地の現状を知ってもらうつもりだ。手始めに十二、十三日に開かれる文化祭で、被災地訪問の成果や教訓をまとめて展示する予定だ。